
榛

夢来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

榛

【Nコード】

N1403V

【作者名】

夢来

【あらすじ】

イギリスにあるシンプルな造りの、しかしそれでも“お屋敷”と呼ぶのに相応しい家に、その老婦人はいた。

彼女はかつて日本に住んでいた、生粋の日本人だ。とある財閥の令嬢として生まれ、やがて一人の男に恋をし、結婚した。

彼女は現在の夫と家庭を築くまで、自身の恋をモデルにした小説を書いていた。

タイトルは漢字で一文字。

榛。

“はしばみ”こそ、彼女の心を、人生を染めた、落ち着きあるヘーゼルカラーなのである。

老婦人の指が昔を懐かしむようにその本の表紙をなぞり、そして、
頁を捲った。

終章の後に

イギリスにあるシンプルな造りの、しかしそれでも“お屋敷”と呼ぶのに相応しい家に、その老婦人はいた。

彼女は広々とした部屋に設置された、アンティークな作りの書き物机の前に腰掛けていた。大きな窓が取り付けられ、柔らかな太陽の光が射し込むこの部屋は、長く白い髪をシニヨンにまとめた、この老婦人の物である。

彼女はかつて日本に住んでいた、生粋の日本人だ。とある財閥の令嬢として生まれ、やがて一人の男に恋をし、結婚した。

彼女は現在の夫と家庭を築くまで、自身の恋をモデルにした小説を書いていた。趣味として書いていたそれは製本され、話題になる程のヒットこそしなかったものの、定着したファンは付いた。

老婦人が座っている華奢なデザインの椅子の前、木製の机の上には、三冊の本が並べられていた。各二十章前後からなるそれらの本こそ、彼女が日本で出版した小説だった。

やや日に焼けた表紙は元より茶色く、そこに銀の文字で記されたタイトルは漢字で一文字。

榛。

“はしばみ”こそ、彼女の心を、人生を染めた、落ち着きあるヘーゼルカラー。

老婦人の指が昔を懐かしむように本の表紙をなぞり、そして、頁を捲った。

終章の後に（後書き）

“ある凸凹な二人の話”に出てきた、あるお嬢さんと優しい方の話をまとめました。例によってこっちの方が話が分かるかと思えます。ある時代に生きた彼らの、エンディングからオープニングまでをお楽しみ下さい。

以上後書き、夢来でした。

一巻、第一章

時は明治、きらびやかな洋装に身を包んだ男女がひしめく鹿鳴館。その洋館内の隅、壁に沿った暗がり、わたくしは一人、ぽつんと立っておりまして。

鹿鳴館とは明治政府が設けた内外国交歓のための社交場で、毎夜のように夜会や舞踏会などが催されているので御座います。

今宵、企業家である父は、知り合いの華族の方に誘われて、わたくしと共にこの館に赴きました。館に着いた途端、父とその御友人は皆様の元へ御挨拶回りに行ってしまったので、わたくしはこうして一人佇んでいるので御座います。

豪華絢爛な内装のこの館は大変賑わっておりましたが、聞こえてくるのは異国の言葉ばかりで、目に入るのは西洋風のお辞儀をする如何にも気取った人々ばかりで……、わたくしは何だか落ち着けずにいまして。

真っ直ぐ前に向けた視線の先では、男女がぴたりと体を寄せ合って西洋式の踊りに興じており、気恥ずかしくなって少し目線をずらせば、日本人の男性が西洋人の女性を踊りに誘っておいまして。

どこを見てもその華やかな様子に気が気でなくなつたわたくしは、何とも情けないお話で御座いますが、早く御父様が戻って来ないかと、今にも泣き出しそうな心持ちになっておいまして。すると、

「Excuse me, uh... what's wrong?」

甘やかな響きを持つ低い声が、不意にわたくしの鼓膜を震わせました。驚いて顔を上げれば、そこには一人の西洋人男性が立っており、はしばみ色の瞳を細めて、心配そうな表情でわたくしの顔を見下ろしておりました。

とても背の高い男性で、お歳は——異国の方の年齢は大変分かりにくいもので御座いますが——大体四十代程度でしょうか。栗色の

髪には少々白髪が混じっていらつしやいます。

「あつ……、」

わたくしは英語の教養がありましたので、その男性がわたくしのことを気にかけて下さっていることがすぐに分かりました。折角心配をして下さった優しい方に何も返さないというのは失礼に値すると思い、わたくしは、「いえ、大丈夫です。御心配どうもありがとうございます」に代わる英語を、その男性に送りました。

すると男性は柔らかに微笑み、日本語にすると次のようなことを仰いました。

「それはよかった。あまりに浮かない顔をしていたから、てつきり具合が悪いのかと」

わたくしが習っている標準的かつ米国的な英語の発音とは少々異なるようで、その方の発音はどちらかというと英国独自の訛りがあるようでした。わたくしにはそれが聞き取りにくいとは思えず、かえって温かみや親しみやすさを感じました。

そうして何度か言葉のやり取りを交わす内に、わたくしとその優しい方は、暫く一緒にお話をするにしたので御座います。

改めて話してみますと、わたくしは自分でも驚く程あつさりと、彼に打ち解けることが出来ました。

たった十分程度の会話の中で、わたくしはこの優しい方が英国人であることや、貿易会社の社長を勤めていること、今日は臍臍にしてもらっている政府要人に連れて来られた、ということなどを知りました。わたくしもまた、自分が何者で、今日はどのようにここへ来て、何故あの場所に立っていたのかなどをお話しました。

「成る程……それは詰まらなかつたね。だけど、格好付けの米国人に声を掛けられなかつたことはラッキーだった」

「ええ、わたくしもそう思いますわ」

その優しい方が、はしばみ色の瞳に悪戯っぽい光を宿して笑うものだから、わたくしもつい、釣られて笑ってしまうので御座いまし

た。

「さて……、」

ひとしきり笑い合った後、彼は急に真剣な表情になり、こんなことを仰いました。

「君にとつて、とても残念なお知らせがある」

——わたくしは自身の体が固くなるのを、はつきりと感じました。
「残念な……お知らせ、とは……？」

彼はやや長い時間、黙ったままわたくしを見ていらっしやいましたが、やがて何か企み事を含んだような笑みを作ると、

「どうやら四十代も半ばに差し掛かろうとしている英国人が、いた
いけで純粋な可愛らしいお嬢さんを、ダンスに誘うようだ」

「……shall we dance？」

少々おどけた調子で、芝居がかったお辞儀をしました。

「まあ……そんな、わたくし……」

わたくしはもう、その一言にすっかり照れてしまい、面映ゆくて仕方がなかったので御座いますが、

「yes, sure. . . . I'm glad」

気付けば、そんな返事をしておりました。

時は明治、きらびやかな洋装に身を包んだ男女がひしめく鹿鳴館。その洋館内の中央、輝く装飾電灯の下、わたくしは今夜知り合った優しい方と、手を取り合って踊っておりました。

先程まで男女が身を寄せ合って踊りを踊ることに恥ずかしさを感じていた自分はどこへやら、わたくしは今、あの優しい男性の視線を独り占めしながら、ゆつたりとした音楽に身を委ねているので御座います。

彼に預けた体が一度くると反転させられた時、人々の隙間からちらと、顔を真っ赤にしながらお酒を飲んでいる御父様が見えまし

た。

嗚呼、今この様子を見ていらっしやる全ての皆様、今宵の出来事は、どうか御父様には御内密に――。

一巻、第十七章

書店を出れば、外は雨で御座いました。お店に入る前まではまだ曇り空でしたのに、今はすっかりと雨が降っております。

しかし、わたくしはちゃあんと西洋製で紫色をした細身の傘を持つて来ていたので、何も心配することはありません。

そう思いながら軒先に置いてある傘立てに自分の傘があることを確認すると、わたくしはそれに手を伸ばしました。

——その時で御座います。

視界の端に、ちらと何か黒い物が映り込みました。

一体何かしらと顔を上げれば、広い道を挟んだ向こうの通りに、大きなこうもり傘を差した男性が一人、こちらを向いて立っております。……傘を差していらっしゃるので、その顔がこちらを向いているかは分かりませんでした。

すると、その傘の男性が、ふいにこちらに向かって歩いていらっしゃいました。左右を確認して通りを渡り、書店の軒先に立ちますと、——つまりわたくしの目の前で御座います——その方は体に合わせた大きな傘を、軽く上に上げました。

その下から現れたお顔は、穏やかににこりと微笑んでいらっしゃいます。男性は、低く、甘い響きを含む声音で、優しくにわたくしに話し掛けました。

「やあ、可愛らしいお嬢さん。こうもどしゃ降りだとびしょ濡れになってしまうよ。私が傘に入れて差し上げましょうか」

聞き慣れた声に、異国の言葉。傘の下から現れたのは、わたくしのよく知る優しい方で御座いました。

わたくしはその意外な人物に驚き、嬉しくなり、しかしすぐに悲しくなりました。

「あら、どうもありがとうございます。優しい方。ですが、生憎と言いましょるか、幸いと言いましょるか、わたくし、傘を持っていますの」

彼の折角のお誘いでしたのに、わたくしは少々恨めしい思いで、傘立てにささる華奢な傘を見詰めました。けれども、

「そうですか、それは良いことだ」

優しい方はわたくしの顔を覗き込むようにして身を屈めると、少しだけおどけた調子でおっしゃいました。

「それでは可愛らしいお嬢さん、私が貴女をご自宅までお送り致しますしょう」

予想もしていなかったお言葉に、わたくしは目をぱちくり。一瞬言葉に詰まり、それから思わずこう聞き返してしまいます。

「貴方が？ 何故なのですか？ 優しい方」

それを聞いた彼は——わたくしは何か可笑しな事を申しましたでしょうか？——少しだけ意表を突かれたような表情を作って、次の時にはいつものように柔らかく目を細め、

「何故って… そうだな。理由を上げるとするならば、こんな雨の日は辺りが暗い。可愛い女性を一人で帰らせるのは不安だよ」

堪らず身をよじらせてしまいたくなるような、恥ずかしくって照れ臭い台詞を紡ぎ出しました。「まあ、お上手」

そんな心の内を悟られたくありませんでしたから、わたくしはそう言って微笑んで見せますと、その優しい方は稀に見る意地悪な笑顔をするのでした。

そんな反則な表情をされますと、もうわたくしの心臓はときどきと煩く早鐘を打ってしまい、それが彼に聞こえてしまうのではないかと思うくらいで御座います。

「さあ、可愛らしいお嬢さん。お手をどうぞ」

そんなわたくしを見かねたのか、優しい方は奥歯で笑いを噛み殺しているようなお顔をしながら、そっと右手を差し出しました。

わたくしは躊躇いがちに、その大きな彼の手に自身の左手を重ね、素直な気持ちを伝えました。

「そうですね、優しい方。折角こんな所で出逢えたんですもの。もう少しだけ……二人で」

雨の中を、二つの傘が並んでゆきます。一つは小洒落た紫色の傘、もう一つは、その傘さえも隠してしまいそうな程大きなこもり傘。二つはある家を目指しているようでありましたが、それにしては、随分と遠回りをしているようでも御座いました。

二巻、第十九章

「あのう、」

鹿鳴館、今では“華族会館”として使われている館の前を通り掛かった時のお話で御座います。

時刻はもう間もなく夜半が訪れようとしている頃。わたくしは夜のとばりに包まれた空を見上げ、ふと歩みを止めました。

仰ぎ見た空には真ん丸なお月様が浮かび、きらきらと輝く銀色の光を放ちながら、にこにこわたくしたちを見下ろしております。

「これは、わたくしの独り言で御座います」

息を漏らすようにぼつりと呟けば、その声に反応して下さった優しい方は、わたくしの隣をゆく歩みを止め、お月様以上に優しい笑顔を向けて下さいました。

わたくしはそれが嬉しいやら恥ずかしいやらで、今から言おうとしていることをやっぱり止めてしまおうかと思いました。……しかしそれでも、わたくしは、今、どうしても、聞いて頂きたかったので御座います。

これが、この方と一緒にいることができる最後の時間かもしれない。

その思いが、わたくしを突き動かしたのでしょう。

「ある日、英語の教師として教壇に立った夏目漱石教授は、とある英国の小説にあった“*I love you.*”という台詞を、日本語でそのまま“愛しています”と訳した生徒をたしなめたそうぞ御座います」

ちらと壮年の男性に視線を向ければ、彼はついと顔を背けました。それがわたくしには「聞いていないよ」と仰っているように思えましたので、少しばかり安心して、“独り言”の続きを紡ぐのです。 「それから漱石教授は、それに代わる和訳を生徒に教えました。その言葉というのは……、」

ところが、ここまで言ったところで続く言葉が喉に支え、ほんの僅かな時間息が詰まってしまいました。唐突に、何かがわたくしの言葉を阻むので御座います。

こんなことを言つて、はしたないからしら。品のない女だと思われぬかしら。そう思われたとき、彼は、ちゃんとそれをわたくしの“独り言”にして下さるかしら……。

「伝えたい」がわたくしの本能であると言うのなら、この支えは理性とでも呼ぶのでしょうか。想定し得るあらゆる最悪の場合が次々と頭の中に浮かび、わたくしに不安を募らせます。

でも……、それでも。

迷いを振り切るようにして冷たい空気を胸いっぱい吸い込むと、わたくしはそれをゆっくりと吐き出しながら、一つ、二つ、数えま

す。それから……、
「月が綺麗ですね」

“愛しています”に代わる言葉が、辺りの闇に吸い込まれてゆきました。そして、それを仰ったのは、彼でした。

「今夜は月が綺麗ですね、可愛らしいお嬢さん」

声の主が、ゆっくりとこちらにお顔を向けます。

つられるようにしてわたくしもゆっくりと顔を上げれば、そこにはしてやり顔でくすりと笑って見せる優しい方がおりました。

「……知っていらっしゃったので御座いますか、このお話」 自らが言わんとしていた台詞を先に言われて拍子抜けしてしまつたわたくしは、驚きと戸惑いの中間で、彼にそう問い掛けます。

「いや、私の独り言だ」

意地悪な人は、しれっとそうお返事なさいました。
何か言い返しましょうか。

ばつが悪くなつたわたくしは、少し俯いてもじもじとするばかりで御座います。

お互いに立ち止まつたままそうしていると、十数秒の後、頭上からぶつ、と息が漏れる音が聞こえてきました。

ちらと目線だけをその方向に動かせば、目の前に彼の大きな掌が差し出されました。わたくしはやや躊躇しましたが、思い切ってその手に自分の指を絡めました。

こんなところを誰か人に見られてもしたら大変なのだけれど。

心配になってきよときよと周囲を見渡しましたが、大丈夫、きつとお月様しか見ておりません。

この瞬間、わたくしはようやく世間のしがらみから抜け出せたような心地になりました。

——そう、この瞬間だけでいいので御座います。間近に迫った制限時間を、忘れさせてくれるのなら。

ぴたりと彼に寄り添えば、彼もまた、名残惜しそうにわたくしの肩に腕を回して下さいました。溢れ出しそうになる涙をぐっと堪えて、わたくしは彼の横顔を見上げます。

今晚は、本当に本当に、月が綺麗な晩で御座います。

三巻、第二章

ある冬の日。その日は今年一番の寒さで御座いました。

しかし、その日は某小説作家さんの新刊が発売される日でもありましたので、わたくしは書店へ赴いたので御座います。

その帰り道に、ある小さな公園の前を通り掛かりますと、こんな寒い日にも関わらず、子供たちが元気に走り回っております。

それを見たわたくしは、その無邪気であどけない様子に何だかすっきり微笑ましい気持ちになってしまいました。それなので、指先がかじかむのにも構わずに、公園内の花壇の淵に腰掛け――ベンチには子供たちの御母様方が座っておりますから――、ついさっき購入したばかりの本を取り出し、そのままそこで読み始めたので御座います。

子供たちの笑い声や、砂を蹴る音、遊具と触れ合う金属音が、風に乗ってわたくしの耳に届きます。……たまに、まだ小さな子供が癇癪を起こす声や、それに伴う泣き声なども聞こえます。

平穩を象徴するそれらの音を聞きながら、わたくしは本の世界にどんどん引き込まれていくので御座いました。

「何の本を読んでいるのかな？ 可愛らしいお嬢さん」

周囲のあらゆる音が遮断され、時の流れさえも忘れかけた頃、ふいに頭上から、そんな意味を持つ英国なまりの英語が降ってきました。

「きゃ……！」

吃驚したわたくしが小さな悲鳴を上げて、同時に顔も上げますと、「まあ、貴方でしたの？」

そこには、優しい微笑を湛えた、あの愛しい方が立っていらっしやいました。

「ああ、私だ。ご機嫌よう？」

彼ははしはみ色の目を細めてわたくしを見ながら、隣の席——正確には“淵”で御座います——に腰掛けました。

「ええ、どうもありがとう。貴方は？」

わたくしは膝の上に開いていた本を畳みながら、彼と同じく英語で答えます。……お世辞にも、発音が良いとは言えないでしょうが。

「私も、調子は良いよ。……ところで、君は寒くはないのかな？」

「え……？ あっ……いやだ、わたくしったら」

彼の言葉で、わたくしはようやく辺りが橙色に染まり掛けていることに気が付きました。

今し方まで遊んでいた子供たちは、もうとつくに一人残らず帰ってしまっていたようで御座います。自分がどれ程読書に夢中になっていたのかと考えると、冷たくなり過ぎて感覚が無くなりつつある頬に、かつと熱が集まるような思いでした。

「読書もいいけれど……そのせいで体調管理が出来なくなるのは感心しないな」

優しい方が、わたくしをたしなめます。

「………はい。」

わたくしは何とかそれだけ言うと、こうべを下に垂れました。

「……分かったのなら、いいんだよ」

けれども、優しい方は穏やかな口調でそう言うと、二、三度軽く叩くようにして、わたくしの下げた頭を撫でて下さいました。

「あっ……！」

わたくしは再び顔に熱が集中するのを感じました。どぎまぎしつつも慌てて面を上げますと、

「さあ。送って行くよ、可愛らしいお嬢さん」

優しい方がさっと立ち上がり、わたくしに手を差し伸べて下さいました。

「あ……ええと……」

恐らく今のわたくしの顔は、八百屋に並ぶ新鮮な林檎以上に真っ赤でしょう。わたくしが彼に差し出されたその手を、取るか取らない

いかで逡巡しておりますと……、

「帰ろう?。」

どうやら待ちきれなくなったらしい優しい方が、わたくしの手を大事そうに取って、ふわりと立ち上がらせました。

「あ……あの、ええと、その……」

ご迷惑じゃないかしら、とか、何かご予定があつたかもしれない、とか、いろいろな考えが頭の中を巡ります。

しかし、わたくしの手をやりわりと包んだ彼の掌が、あまりにも優しいものだから……、

「……………ありがとうございます」

——わたくしは、彼に甘えることに致しました。

優しい方と、並んで帰る帰り道。

その日は今年一番の寒さで御座いましたが、わたくしの胸の内は、間違いなく今年一番の暖かさを持っておりました。

序章

「千歳」

こんこん、という小さくも軽快な音と、重低音ながらも甘やかな響きを持つ声に、老婦人は弾かれるようにして顔を上げた。

「はい、ロビンさん」

思い出から現実に取り戻された――否、“エスコートされた”彼女が、開いていた本を閉じると、しなやかな動きでノックされたドアを見やった。

「もうすぐ昼食の時間だよ」

かちやりと静かにドアを開いたのは、銀色の髪を持つ老紳士だった。

「まあ、もうそんな時間になりますの？」

右手を軽く口許に当てた老婦人は、驚いた様子で数回目をしばたかさせた。

「ああ。それで、ハンナが今日は天気がいいから庭でランチにしないかと言っていた」

愛しい妻の、年を重ねても尚可愛らしい反応に老紳士は榛色の瞳を細めつつ、先程聞いたばかりのメイドからの提案を老婦人にも伝えた。

「あら、さすがハンナ。とてもいい考えだね。そうしましょう、ロビンさん」

それを聞いた老婦人は少女のように顔を輝かせ、にこやかな笑顔で賛成をした。

「決まりだ。さあ、お手をどうぞ。可愛いお嬢さん」

男はちらと机の上の三冊の本に目を止めると、思い立ったように恭しく手を差し出した。

「あ……いやですね。少し気障じゃありませんこと？ 優しい方」
口でこそ相手をたしなめるようなことを言うが、女は心底嬉しそ

うにその大きな手に自信の華奢な手を乗せた。

「今日のランチは何だと思えます？」

「ハンナはベーグルを焼いてみたからサンドイッチにでもしようと言っていたよ」

「あら、知っているなんて詰まりませんわ」

「ははは、デザートが何かは知らないよ」

「きつとジャムを使ったものよ」

「最近ジャム作りに凝っているからね、彼女は」

人目を気にせず手を取り合い、他愛もない会話に花を咲かせる。

羨望し、渴望した“ありふれた幸せ”をようやく手に入れた二人の男女は、仲睦まじく寄り添いながら、部屋を後にした。

序章（後書き）

“榛”、これにて完結です。楽しんで頂けたでしょうか？

若かりし日の彼らは本編には書いてないですが、もつと山あり谷ありの波乱万丈な恋をしていたと思うんですよね。優しい方がイギリスに帰国しちゃう話とか、お嬢さんが政略結婚を振り切って駆け落ちしようとする話とか……。

そういう経験を経て結婚まで漕ぎ着けたと思うのですが、私の技量ではこれが精一杯でした……。誰か上に上げたような話書いてよ。
（そう言いながら友人を見詰める作者）

榛はこれで終わりましたが、老夫婦の幸せな人生はこれから始まります。ここまで読んで下さった皆様、ありがとうございます。

以上後書き、夢来でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1403v/>

榛

2011年7月27日22時37分発行